

八畳ほどの広さの部屋二間に二十人が詰め込まれたのだから寝るのがやっとである。それに南京虫が多く悩まされた。一日一回しか外には出られない。マラリア、下痢で入院者も出たが、それらの人のうち何人かは死んだであろう。

抑留期間中はカタツムリ、蛇を捕り副食とした。粥は米だが腹がいっぱいにはならないからである。刑務所は高い塀で囲まれている本物の刑務所である。風呂にはたまに入ったが、あまり記憶はない。一週間に一度ぐらいだったのだろうか。収容された部屋の中は海軍だけで、将校も兵も皆同じであった。

我々は住民を虐待したこともない。むしろ友愛の精神で接し、現地人とも協力をし合っていたのだったが、何故か通信隊は全員が刑務所に入れられたのである。その間の不安は大きいもので、もし現地人が間違えて指摘すればそれまでであり、抗弁も出来ない。しかし、約一カ月後に船に乗せられ、今度はレンパン島へ入れられ、開墾し自給自足の生活をした。自分で食物を作り、家も建てて生活するのである。

第一次大戦後、ドイツの捕虜が収容され、多数の者が餓死したという、いわくつきの島である。日本人にはレンパン島を恋飯島、飯が恋しい島、食糧で苦勞した島として記憶に残る島である。戦勝国が敗戦国に対してとった見せしめの処遇であったのかもしれない。マレーやインドネシアの戦闘は日本軍が勝っていたのであるから。レンパン島では歌手の藤山一郎が同室であった。彼は連合軍の所へ慰問として連れて行かれた。

昭和二十一年レンパンを後に復員することができた。

死闘の鉄

兵庫県 光延 一徳

はじめに全戦域で戦没された二百四十万余柱の英霊に対し、御冥福をお祈り申し上げたい。なかならず私の参戦したフィリピン戦線で、護国の鬼として国家の

ために散華された、五十一万八千余柱の各々英霊に心から御祈念、お礼申し上げます。

私が今日あるのは散華された戦友達のお陰と、しみじみ感じている今日この頃である。戦後五十余年を経て、今想い出となるものは、大きな苦しみは小さくなり、小さな喜びは大きな楽しみとなったことである。

私は昭和十五年徴集の現役兵である。岡山備前長船町で徴兵検査を受け、徴兵官から「光延一徳、第一乙種合格」と宣言された。当時は第一乙種合格は即甲種合格に編入されて、翌年一月十日に姫路五十四部隊へ入営した。軍装を整えると十日ほど後に満州に出動した。

何も解らずに引率され、朝鮮から、囚人を通して満州国佳木斯に到着した。満州第一二四部隊だった。第一中隊、第二中隊は輓馬中隊、私は第三中隊の新設自動車隊である。隊には古参の二年・三年兵がいた。彼らは野戦下番といって、支那事变に従軍し、昭和十四年に一度姫路に凱旋している連中だから、気が荒く

にも二にも私的制裁が横行していた。

極寒の地で起床から夜の消灯就寝まで、少しの余裕もなく「貴様らは現役兵だ頑張れ頑張れ」と激励された。

一期の検閲で初年兵教育も無事終了してほっとしていると、特別呼び出しがあつて中隊長から直接話があり「光延、下士官候補生の試験を受けろ」と厳命された。「大動員があつて近々部隊人員が倍增する。将校も下士官も不足する。貴様のような有為な者を兵隊のまままで終わらせたくない」と諄々と説得され、下士候にさせられ、新京の学校に行かされた。

この頃に、ノモンハン事件で、ソ連(ロシア)に苦杯をなめさせられた関東軍は、全国的に大動員を掛けて、関東軍百万人の部隊を編成し、関東軍特別大演習(関特演)を敢行した。自分の原隊も第一大隊と兵員等すべて倍增して、兵営も朝日兵舎の在来のほかに敷島兵営と二カ所に分かれて駐屯した。

約十カ月の教育を経て陸軍伍長に任官して帰隊し

た。即日付にて第十師団司令部・輜重兵本科下士官として転属を命じられ、以来「捷号作戦動員卜令」まで司令部に勤務した。その業務内容は、自動車隊出身者であるから車輛部に勤務して、その責任者として車輛の配車・点検等々を行う任務だった。

将官閣下・佐官・参謀部・副官部・その他多くの将校が営外居住者なので、朝晩の登・退庁の配車から不意の行動、他出の場合等を考えて勤務した。些細な事だが、各操縦手に、師団長旗（団体長旗）・将官旗・佐官旗・尉官旗等々を車輛の前に立てることを充分注意した。万一掲揚無き場合に欠礼等があったらその者が罰せられるからだ。

平時使用車輛は、ガソリンを使用せず代用燃料と言って薪を燃やしてガスを発生させて車を走行させるために、特に冬期においては大変苦勞した。エンジン始動時には、クランクシャフトを手動にて回転させて初めて始動するために大変勞力を必要とし、逆火のために手指を怪我した者も多かった。

昭和十九年七月二十五日、極秘電にて第十師団に大本營發捷号作戦命令による動員令が下った。

同八月四日、第十師団司令部先遣隊出發す。

同八月十日頃より軍人家族・婦女子佳木斯出發、内地へ帰還のため、官舎と佳木斯駅へと荷物等の搬送。

右終了、出陣準備完了時点で、「光延軍曹は原隊輜重兵第十連隊へ復帰せよ」の命令で、同年兵のいる第二大隊本部付として帰って来た。

この四月より、ソ満国境付近に一大陣地構築のため東北隅の同江・富録（対岸がハバロフスク）等に全員出動していたが動員令下る。すわ一大事という時にも常時の訓練で鍛えていた関東軍の精銳師団である。動すること無く一糸乱れず肅々と物事を運んだ。私の同年兵はすべて将校・下士官・兵隊に至るまで、部隊の主幹として活躍していた。ちなみにこれから申し述べることで時と所が私と差異が生じて、戦場における常道である。まずは念のため。

連隊名称は第十師団輜重兵第十連隊だが、秘匿名

(防諜名)は鉄兵団で、連隊は鉄第五四五四部隊である。なお、満州第一二四部隊の出陣時の編成は第二大隊本部米倉俊治大尉の下に五十七人、第四中隊(義烈隊)は松崎義夫中尉以下九十九人、第五中隊(尽忠隊)は井上寿夫中尉以下九十七人、第六中隊(結誠隊)は松井和夫大尉以下一〇六人、総員三五九人。爾後入院患者、並びに増援隊、救援人員等で五〇〇余人が我が大隊に所屬したと思う。

車輛は本部指揮官車をはじめ七車輛の貨物自動車(含、機工車・鍛上車・電工)及び修理車輛等だった。各中隊ごとに四十七車輛を有していたが、満州出陣時、朝鮮釜山乗船時、台湾高雄の出港時にそれぞれ積み込み出来ず、各中隊とも戦線にて活動した車輛は三分の一度だった。

昭和十九年八月十三日、払暁から佳木斯駅頭にて軍用列車に弾薬・糧秣等軍需品の積載を行い出発、ハルビン・新京・奉天と鴨緑江から釜山まで、乗船待ち配船決定、車輛をはじめ全物資を搭載し、九月二日夕方出港と同時に敵の飛行機と潜水艦に充分の警戒を行い

ながら同月十八日基隆港にて上陸、台中の南約二〇キロの彰化街に入り楠小学校に駐屯した。

各中隊は台湾全島にわたり分散し、小隊単位で活動した。陣地構築や諸物資の搬送等、特に満州当時の訓練と異なり対米戦闘は夜間戦闘だと言って輸送業務のほか、総て夜の活動だった。車輛には前後左右に白線を入れた。幅五センチ・長さ五〇センチで夜間でも明瞭に識別出来得るためだった。

鉄兵団司令部は台中に駐留していた。毎日彰化から台中に命令受領に出張があり、私も週に三回ほど同行した。その都度顔馴染みの上層部とちょっと話したものだ。勤務も楽な上に気候も温暖で精神が少し緩んだと思った十月十一日、十二日と、二日間にわたり空襲警報で驚かされた。これは対米海空戦だった。高雄は多大な損害を受けた由。古人曰く油断大敵とはこのようなことをいうのだと思った。

十二月三日、出動命令で高雄港に集結した。同五日先遣隊として「有馬山丸」が出航した。乗船主力は歩兵第三十九連隊第二・第三大隊、搜索第十連隊(騎兵

隊)野砲第十連隊第二大隊、工兵第十連隊、輜重自動車第五中隊及び修理班一個分隊その他だった。同輸送指揮官は第三十九連隊長永吉実展大佐であった。

その時点で第一師団(玉兵団)がレイテ島で米軍を迎え撃って激戦中であり、その米軍の後方に逆上陸して、敵を破砕殲滅せしむの命令であった。そのためフィリピン・マニラに先行し、上陸用舟艇にて出撃準備中に、敵の大輸送船団が十四日早朝に北上するのを発見し、レイテ島進攻を断念し、急遽、バターン半島守備に変更となり、海路上陸用舟艇にて、陸路は我が自動車第五中隊の全車輛に兵員を満載して急送した。

以後、歩兵第三十九連隊の二個大隊は終戦に至るまで鉄兵団長の指揮を離れて、同地区において吉永支隊として、軍旗を奉持し奮戦した。なおその武功により方面軍司令官山下大将より感状を授与された。自動車第五中隊はサンホセにて部隊に合流し、米倉大隊長の指揮下に入った。

鉄兵団主力の高雄港出帆は十二月十三日。

「大威丸」輸送指揮官、歩兵第六十三連隊・林茂

一連隊長、乗船部隊Ⅱ歩第六十三連隊主力、野砲第一大隊、輜重第二大隊四中隊、その他。

「乾瑞丸」輸送指揮官・輜重第十連隊・鍋島英比古連隊長・乗船部隊Ⅱ歩兵第三十九連隊主力、歩兵第十連隊第二大隊、歩兵第六十三連隊第三大隊、野砲第十大隊と輜重第十連隊主力、その他。

「江の島丸」輸送指揮官・歩兵第十連隊・岡山誠夫連隊長・乗船部隊Ⅱ歩兵第十連隊主力、野砲第十連隊、輜重自動車輓馬、各中隊、その他。

以上四船に鉄兵団は比島戦線に出陣し、総兵員一三、〇〇〇人であった。

師団長・岡本保之中将は「捷号作戦命令発動」で比島進軍に先駆けて、幕僚・要員が随行して空路マニラに先行し、第十四方面軍司令官山下奉文大将の隷下に入る。

この時点で南方総軍・比島方面軍隷下部隊は従前からの部隊の他に、第八師団「杉」兵団、第三十師団「豹」兵団、第一〇〇師団「扱」兵団、第五十四旅団「萩」兵団、第五十五旅団「菅」兵団、第六十一旅団

「鎧」兵团、レイテ島に第六十八旅団「星」兵团、第二十六師団「泉」兵团、第十六師団「垣」兵团、第一師団「玉」兵团、その他が加わった。

ルソン島には在来部隊の外に第十師団「鉄」兵团、第十九師団「虎」兵团、第二十三師団「旭」兵团、第一〇五師団「勤」兵团、第一〇三師団「駿」兵团、戦車第二師団「撃」兵团、第五十八旅団「盟」兵团、第六十一旅団「鎧」兵团等々、その他海軍・空軍地上部隊その他であった。

十月にはレイテ島決戦で米軍が艦砲射撃を開始し、同月二十日には約十方の大部隊を上陸させて猛攻撃を開始した。制海・制空権は完全に敵の手にあり、マバラカート（ルソン中部）の空軍基地から神風特別攻撃隊が出撃し、一機一艦撃沈精神で体当たり攻撃を敢行した。このレイテ決戦で開戦以来の嚇々たる武勲を挙げた優秀な飛行機乗りは、大部分空に散り海の藻屑と化した。海陸の空軍は航空機と搭乗員を失い、以後、空に対しては米軍機の独壇場となった。

鉄兵团乗船の四船も「有馬山丸」は前記の如く、「大威丸」は十二月二十三日北サンフェルナンド港に無事入港し、兵員をはじめ全物資を揚陸した。その最中に「乾瑞丸」が轟沈された。時十一時三十分、私達が揚陸作業中だった北方に一大音響を聴き、鍋島部隊長、第一大隊長・丸本金春少佐、第六中隊長・松井和夫大尉はじめ多くの幹部将校はじめ各々戦友が文字通り「水漬く屍」となられた。一万二千柱の英霊の無念さを想い、心から冥福を祈ると共に敵愾心を煽ったのだ。

「江の島丸」は航海途中より「ルソン島最北端に上陸すべし」でアパリ港に向かった。その港湾施設が米軍機に爆撃されて炎上中、六〇キロ東方の小さな港カサブランカに投錨し揚陸した。物資の揚陸に困難を極め約半数の積載物を残して船は台湾に引き返した。

一応、鉄兵团はルソン島に上陸はしたが、マニラ・北サンフェルナンド・最北端のアパリ地区と三カ所に分断された。

鉄兵团で聴いた話。

土屋参謀長が第十四方面軍に出頭し爾後の戦闘配置等を問うと、第十四方面軍参謀副長西村少将は机上に五〇万分の一の地図を示し、サンホセ北方台地を指示し、「この地点を占領し北上する敵を阻止せよ、なおこの前方に突出せる三角山の一部をもって陣地となし、リンガエン湾に上陸し、サンホセ方面に進出するのである。米軍の行動を妨害せよ」と命じて、同日西村少将は大本営に飛び立ったということである。

それまで西村参謀は方面軍において、参謀長武藤中将と不仲で会話もほとんど無かったようだ。山下軍司令官は参謀副長の交替を決意されガダルカナル戦で有名な小沼少将を招くことになる。小沼参謀副長は鉄兵団参謀とバレテ峠・アリタオ・バンバン等も戦線指導に来た由。五〇万分の一の地図で部隊の展開など雲を掴むような話でとても部隊の陣地占領など堪えるものでなく、兵要地誌としては五万分の一以下の地図でなくは戦略的判断は無理で、第十四方面軍には二〇万分の一以下の作戦地図は皆無であったと言う。前任者達は開戦以来今日まで何をしていたのか。呆れ返った

ということである。

昭和十九年十二月末には鉄兵団司令部はサンホセにあり、第十四方面軍司令部はバギオにあった。鉄兵団司令部は方面軍との作戦上の命令伝達・連絡等でごつた返していた。またフィリピンは十九世紀より、スペインの属領であったが、アメリカがその後英雄ホセ・リサールの力を借りて統治を行い、過去何十年も続いた。それゆえに全比島の地形状況・民族文化等を充分過ぎるほど熟知している。地下に潜ったスパイによって米比軍なるゲリラ部隊を組織し活発に行動していた。

明けて昭和二十年一月には敵が大挙してリンガエンに上陸し、怒濤の如く進んで来た。旭兵团と撃兵团が迎え撃って大打撃を受けたというニュースが伝わった。最終的戦略（比島持久戦）はマニラ東方山岳地帯を死守し、マニラの水源地を断つという作戦を振武集団が制し、横山中将集団長・第八師団（杉兵团）、第一〇五師団（勤兵团）の一部、海上北進基地諸隊・第四

航空軍団・マニラ海軍防衛隊・その他八万余人があたり、健武集団はマニラ平野の西方山岳地帯、クラークフィールド以西、バターン半島含む地域にあたった。健武集団は、集団長塚田中將、約四万人が当たたる第一挺進集団・独立歩兵第二連隊・機動歩兵第二連隊・第四航空軍地上部隊と鉄の歩兵第二十九連隊の二個大隊・その他海軍諸隊等。ルソン最南部地区・野口兵団と藤重部隊。

山下奉文大將直轄で北部ルソン地区は、尚武集団と号し、十五万二千余人、鉄・撃・虎・旭・駿・勤・盟・鎧の各兵団、独歩第十一連隊、その他だった。

北部ルソンはカバヤン河流域の穀倉地帯があり食料の確保が出来ると思った。西海岸から東方オーロラ州までカラバリヨ山系が南北に分断している。バギオの南入口ロザリオからベンゲット道路はその昔日本人勞務者が建設した山岳道路で、これから東に延びた千数百メートル級の山並みが、敵の侵入を阻止するジャングルで、南北縦貫の五号国道がバレテ峠である。この峠の南麓にミヌリ村があり、全物資等をマニラや北サ

ンフェルナンドから搬送するのが当面自動車隊に命ぜられた任務だった。不眠不休で全員が励行した。

輜重兵操典の第一輜重兵の本領にある「輜重兵ハ戰役ノ全期ニ互リ確實敏速ニ作戰ノ要求ニ応ズル輸送及補給ヲ実施シ以テ軍ノ戰鬪力ヲ維持増進シ其ノ戰捷ヲ完カラシムルニ在リ。輜重兵ハ堅忍持久ノ氣力備ヘ全軍ノ犠牲タルベキ氣魄ヲ堅持シ自ヲ敵ノ妨害ヲ破摧シアラユル地形及氣象ヲ克服シ昼夜至大ノ行軍力ヲ發揮シ其ノ本領ヲ完ウセザルベカラズ。輜重兵ハ常ニ兵器ヲ尊重シ馬及車輛ヲ愛護シ輸送品ヲ保全スベシ」の如く、輜重兵には戰鬪の文言はなく、ただ「敵ノ妨害ヲ破摧シ」とあるのみだが、自動車隊は後方、兵站基地から同末地までの長距離輸送のために、敵の後方攪乱戦法でゲリラ・スパイ・土民兵、時には落下傘降下部隊等に対しての戦術のために、歩兵訓練を充分行い、在満州当時は輜重業務より歩兵として演習訓練が主だった。

前述の第十四方面軍・鉄兵団司令部の動向、特に参

謀の行動発言等々あるが、それはさておいて、自分の行動を一部述べる。

北サンフェルナンド上陸と同時に全物資の揚陸後、自分と山本篤郎軍曹は本部の四車輛を駆使して、本部物資及び部隊の必需品を奥地のブンカン・ミヌリに搬送した。時の操縦手は、宮根正一、谷口喜作（同年兵）、中村輝義、小柳又二郎（閑特演）、高坂定一、柄谷利正（十七年現役）と皆自動車の神様のような頼もしい面々だった。

当初は白日の中を堂々と自動車を走らせていたが、敵の艦載機（グラマン）が機銃乱射の攻撃を敢行するので夜間行動になり、大変苦しい思いをした。この頃自動車第二大隊各中隊はそれぞれ鉄兵団はじめ他隊の資材を死に物狂いで搬送していた。特にマニラからミヌリまでの輸送は何十輛の自動車が整然と隊列を組んでの行進だ。

敵機としては格好の獲物とばかりに急降下して機銃の乱射。自動車は出来る限り遮蔽物に隠し、路上においてはジグザグに停車し、各戦士は小銃にて対空射撃

を行い、中でも第四中隊の多胡正は満州以来の軽機関銃射手だった。車輛の上に仁王立ちして軽機の連続発射もしてグラマン戦闘機を一機撃墜した。彼の働きは全員に賞賛された。敵もこの一件以来超低空飛行は行わなくなったように思えた。この時点では蟻螂とろろの斧であらうとも、下手な鉄砲でも数撃てば「当たるぞ」と全員小銃を空に向けて撃った。

昭和二十年二月一日、ブンカンからバレット峠を越えてサンタフェの前の大和谷へ移動した。ちょうど峠の内懐でうっそうと繁る大密林だ。ここを部隊本部と第一大隊本部と第一第二中隊の基地拠点として、第二自動車大隊は東方二〇キロのアリタオ対岸マンガヤンの山麓を基地とした。左より第三中隊、第二大隊本部、第四中隊、第五中隊、第六中隊とし、その傍らに部隊本部後備控所を設営した。当初は自動車輸送も盛んに行ったが燃料のガソリンも欠乏し、輸送物資も少なくなり、大部分の自動車は半地下壕を掘って格納した。二〇キロ北方のバンバンからバレット峠・天王山（鉄司令部）まで輓馬車輛一輛を五人で引っ張って輸送し

た。

また、バレテとバギオ（軍司令部所在地）の中間のサラクサク峠、この地は、米軍リングエン湾に上陸後怒濤の如き進軍を迎え撃つべく、旭兵团・重見戦車旅団と満州よりの戦車第二師団撃兵団（勃利・孫呉）（なお戦車第一師団は東京にあり）が勇戦奮闘するも、すべてにおいて敵が優秀で、自軍戦車は大打撃を受け、百数十輦が破壊された。撃兵団は歩兵に改編してサラクサク峠に布陣した。鉄の搜索第十連隊と歩兵第三十九連隊第一大隊（海没再編）はサンニコラスから、カバリシアン付近に陣地を占領し、きわめて優秀な敵の攻撃を受けた。

後日、米戦史によると米第三十二師団と米第二十五師団でサンホセ付近において日本軍を挟撃する計画であった。岡本保之兵团長は鈴木搜索連隊長以下全員が斬り死に覚悟と見て、部隊をサラクサク峠に後退を命ず。撃兵団傘下に搜索第十連隊・歩兵第三十九連隊第一大隊、後で歩兵第六十三連隊の二個中隊等、第十師団関係の部隊が布陣し、終戦に至るまで撃兵団への弾

薬・糧秣の搬送に力が入った峠の後方のイムガンに撃司令部がいた。

サンタフェからの輸送路は悪く、河岸に沿って山を削って出来た路で、車を通すのは大変至難の業だった。自動車はガソリンが無く、輓馬隊は馬が斃れ、輓馬車輛は臂力搬送を行った。

昭和二十年三月五日夜、鉄司令部より自動車大隊出陣の命下る。将校全員本部に集合し、即編成作業をし、各中隊に下命す。一夜のうちに準備完了。翌六日早朝「出陣」の号令で肅々と渡河してアリタオ・ボネ・サンタフェと強行軍で夜明けに到着し、大和谷の部隊本部陣へ行き（二月に新部隊長相沢光二郎中佐着任）出陣報告し、大和谷最奥部にて陣地配置等の打ち合わせあり。いざ北部妙高山に出陣し配置に就く。三月九日だった。

大隊本部を中心に、中央に樋野分隊、左翼に森谷分隊と右翼に自分の分隊と布陣し、約七、八〇メートルの間に蛸壺壕を掘って構えた。

北部戦線はマニラから北に向かって二本の国道があり、第三号国道は呂宋島の西側（東シナ海）に面した海岸線が北に延び、五号国道はマニラより北方中央を最北端のアバリまで通じカガヤン河に並行し、大穀倉地帯を通る大動脈である。この南北の分水嶺がバギオの西方からサラクサク峠を経てバレテ峠と旧スペイン道（鈴ヶ峠）で、この東西線がカラバリヨ山系で一五〇〇メートル級の山並みで南北に分断されている。敵は開戦時より米比軍（ゲリラ）やスパイにて日本軍の状況を知った。ルソン北部の場合も第一目標はバギオの山下軍司令部だ。が実戦上では北部の要はバレテ峠で来襲した。

なお鉄兵団への配属部隊は、泉兵団（第二十六師団）の津田支隊・勤兵団の井上大隊・大藪大隊・独速第二十二大隊・中迫第七大隊・臨時機関銃中隊・開拓勤務隊等々の精鋭部隊だ。その後、激戦中の三月以降に増加部隊として高千穂部隊・松野大隊・鉄道八連隊・第二・第三菊水隊・小川大隊・玉井大隊・戦車撃滅隊（学徒）・高橋大隊・榊原大隊・小切間大隊・楠

田大隊等々。公刊戦史によると総員数二一、七二七人である。バレテの陣容はあたかも大鷲が翼を拡げて天空より獲物を狙う如き陣形である。最前線右翼地区は搜索第十連隊が四十倍もの敵に包囲攻撃を受け凄惨な戦闘の末にカバリシアン陣地を喪失した。岡本鉄兵団長は搜索鈴木連隊長の斬り死にを制止し、後退を命じ、サラクサク峠にて歩兵第三十九連隊乾大隊と合流しその指揮下に入り、鉄の傘下を離れた。終戦時の生存者は両隊共に僅か数人だった。

さて、五号国道まではサンホセ北方十キロ辺りから両側の山並みが逐次狭まり、デグデク川の両岸に少しの畑地があり、右手（ネユ）（タカ）陣地、左側（マロヨン山）、この陣地に内藤大隊主力・集成第八中隊・井上大隊の井上・藤黒各二個中隊及び赤座大隊小林中隊、歩兵第十連隊の一個中隊・歩兵第三十九連隊の吉田中隊等々がブンカン・デグデク等に布陣し、敵の進入を一步も許さない。また、一日でも半日でも陣地を堅持することで後方部隊の陣地構築が万全になる

と、犠牲的精神の発露である。鈴ヶ峠への進入を防ぐためカラングラン方面に大藪大隊が布陣する。

山峡ますます狭まり、ミヌリ・カビンタラン辺りでは、五号国道とデグデク川のみで総て山地となる。峠道第一線陣妙義山陣は村田隊・雄建台板垣大隊・坂田隊。金剛山陣地歩兵第六十三連隊本部と田村大隊と高千穂隊。親山小山陣に野砲兵第十連隊。谷を経て西側は桐陣前田隊。樫陣米田隊。柳陣江原隊と山本隊。一本木陣集成大隊。ぶな野中隊。建武第六十三連隊並びに砲観測隊。榛名山陣小妻大隊。更に西方の高山に秋風山陣に田村大隊・大城中隊。マレコ陣に歩兵第六十三の第十中隊。後方赤城山に佐々木隊。南の三山・宵・南・要陣地には歩兵第十連隊。更に南の鈴ヶ峠に続く山々は久富大隊・松野大隊・貞本大隊。先陣山が東大隊だ。

歩兵第十連隊の西の一番深い谷が一の谷で、ここに要山と金剛山を結ぶ三叉路があり、この所から南に大きくミヌリの奥まで延びている山が妙高山である。南妙高山には歩兵六十三大隊の三個中隊が陣地を構築し

ていた。ちなみに鈴ヶ峠以東太平洋岸までは、地球の古い皺のような山並みが続き、千古斧を入れずで現住民のイゴロット族も寄せ付けぬ大密林のジャングルだ（距離約一〇〇キロ）。よつて当バレテ峠を通過せぬ限り北部ルソンの豊穣な農作物は手中に収められない。なお現配置陣地も月・日により移動あり、また配属部隊・増加部隊等の陣地配備等詳細不明な点あり。特記すべきは中迫撃砲大隊の活躍だ。

十五センチ榴弾砲の弾道は短い、直上・直下の弾道で、山岳・密林における最大威力発揮の重火器である。陣地構築に際し陣地視察を行い、地形等を十分に観察した。妙高山は重要拠点にも拘らず北部妙高山に陣地はなく、南部妙高山との中間は丸裸のゆるやかな山地である。土屋参謀長に進言をすると、この地に前記米倉自動車大隊が着陣したとのこと（佐藤清著『バレテを偲んで』）。

最前線陣地・内藤大隊の玉砕の報が来た。バレテ峠の戦闘も日増しに激化し、昼間は敵飛行機の跳梁激し

くに観測機にて常時見張り飛行を行い、陣地に何物かを発見すると後方砲兵陣に連絡を取り、即座に数百千の弾丸を打ち込んで来る。

日没頃から霧が発生し、峰々・谷々を一面に包み込むと昼間の修羅の戦場も静まり友軍の活動舞台となる。薄暮攻撃、深夜、払暁攻撃と敵が最も恐怖を感じる斬り込み隊の出番だ。戦果の程は思うように挙がらず。時には犠牲のみ大きな時もある。敏速な撤収が至難の業だ。自分の大隊も第一陣に井上中隊を布陣して、特に左斜面、一の谷方面重点に各小隊、分隊を配置に就けた。三月十日のことである。翌十一日名譽の戦死第一号が大西清一分隊長と増田徳治郎伍長だった。中隊本部壕・小隊長壕各分隊ごとに地形地物を利用して、それぞれ横穴や蛸壺壕を掘る（自動車用の鶴嘴とスコップそれに鋸と斧）。自動車隊ならではの工具である。

第四中隊は北部妙高山の最高地点に陣取る。その後方少し下ったところに大隊本部壕も三十人収容できるのを造った。上空の攻撃にも充分耐え得る木材で、鳥

居形を随所に入れた頑丈なものだ。岡崎中尉の重機関銃小隊は移動攻撃可能なように三カ所も五カ所も壕を掘って一番効率の良い方法をとった。本部壕の後方三〇〇メートル地点は完全な馬の背道の杣道だ。その後方が南。歩十の要山と鉄司令部の天王山並びに親山子山を経て歩兵第六十三連隊の金剛山に通じる三叉路で、急峻な坂を北へ降りて行くと大和谷・大和川。陣地北面は金剛山・雄建台に面し敵も近寄りやすく、南側一の谷は深い割に進軍しやすいと大隊長は判断されて、各隊南面に銃口の向くように配備させた。

三月中は第五中隊陣地が敵の目標になり、早朝から夕方まで砲弾が飛んで来た。弾着確認の観測機がブーンと鳴って（タコと呼ぶ）一点に停止した如く観察している。この時が最大の注意時点だった。日増しに弾丸の数も増加した。各人各分隊それぞれ相互連絡を密にして戦務に服す。敵を迎撃するときには、待ちの態勢で敵の出兵を見るので、辛抱のいることである。その間少しでも完全な壕を造るべく穴を深くしたり、L字形やF形、T形と各人で考えて造った。これが後々役

立って生命を助けた。敵に接近され手榴弾や火炎放射も途中の柵で遮断して身は安全だった戦友もいた。三月中に砲弾・爆弾での戦死者は二十人だった。目に見えぬ敵の一発の弾丸での戦死は非常に残念だったろう。

一人十殺の訓練精神が生かされず実に情けなく思った。静かに耳を澄ませば南妙高から一の谷方向で遙か遠くではあったがエンジンの唸る音が聴こえ出した。これは敵が南妙高山麓から一の谷方向に道を造るべくタンクトーザを入れての作業音と知らされた。

三月三十日、敵は道路築造してM4戦車を先頭にして南部妙高台上に姿を見せた。ロクトウの南方二キロ地点だ。我が砲兵陣の火蓋が切られたが、戦車は進んでくる（彼我戦車の相違甚だしく、装甲は日本軍が二五ミリ、M4は九〇ミリと三倍以上の差）。直撃命中しても平然として進んでくる。至近距離でないとい鉄鋼弾の効果なく、一番簡単な方法は随伴歩兵の撃滅だった。これは重機関銃の一斉射撃だ。いかなる戦車も随伴歩兵なくては前進不可能だった。

歩兵第六十三連隊の南妙高陣地も敵の手に落ち、我が第五中隊が敵に包囲され井上寿男中隊長が戦死されたのが四月六日だった。敵地上部隊の進攻前に飛行機による爆弾投下と同時に長距離砲の弾丸が幾百千と来る。その弾も黄燐弾やナバーム弾だ。あたり一面炎に包まれるナバームと硫黄の燃えるガスのために呼吸困難になる。飛沫が壕に飛び込んだら箸ではさんでポイと外に投げ出すより他に処置なしだ。一番悪い奴はなんとと言っても火炎放射器だった。当方から一発撃てば集中砲火の見舞いが何百と来るが、手榴弾投擲は発射音がなく、二、三十メートル地点では最適の兵器だ。

第四中隊と隔絶し大隊長も援軍の方途なく悲愴な面持ちだった。双眼鏡で見ながら「ウーン」と言うだけだった。この時点で歩兵第十連隊が青山・南山に布陣していたが、山砲や連隊砲が手持ちなく、ただ傍観するのみだった由。四月八、九、十日とおびたしい戦死者が出た。

大隊長から「井上中隊撤退せよ」の命令を十日夜に

発せられた。暗闇の中、血路を開いて、第四中隊陣や本部陣へと帰ってきた。但し戦死及び重傷者は置き去りだった。常人には理解出来ぬ仕儀だ。北部妙高山最高地点の第四中隊陣地も当初は灌木がうつそうと生い茂っていたが、敵弾のために焼山の様相を呈し、山肌をあらわにし随所にナバーム弾の焼夷の跡がある。敵もいろんな作戦で攻撃をしてきた。上空からドラム缶にガソリンを入れて投下し火災を起こさせたりという戦法だ。第四中隊陣地に対して敵襲強まり、日毎に戦死者・傷者、その数を増した。

三月末、橋本中尉の第六中隊の第二陣特別攻撃隊が到着した。運命の朝が来た。四月十九日、毎日のことながら大隊長が各守備陣地を巡回されて、一人一人に言葉をかけて激励される。朝霧に覆われた北部妙高山の山容が一陣の西風が吹き抜けて一天に青空が現れた。その瞬間だった。一発の弾丸が飛び来たりて陣地前の台上に立ちし大隊長の頭部を貫通した。私たちの尊敬と信頼を一身に背負っておられた大隊長が、一狙撃兵の手にするライフルのために逝かれしことは残念

という言葉以外にもなかった。(公刊戦記には、この日で米倉大隊玉砕とある)。

敵の攻撃は増々熾烈を極めた。二十二日、夜、橋本部第六中隊長は、残存せる兵隊に各々一本宛の恩賜のタバコを手渡し火を付けてやりながら、全員に「明日は君達の生命を俺にくれ」と申され、早朝五時に突撃とのことだった。悲愴な空気がみなぎる。霧深く一片の星屑も見えぬ蒸し暑い夜だった。

四月二十三日夜明け前に日の丸の鉢巻を締め、右手に軍刀を握り左手に拳銃を持って仁王立ちになって全員に「突撃するぞ、俺に続け」と言っ出て出発された。後に続く数十人の兵隊は散開しながら肅々と前進し、敵前二、三十メートルにて「突撃」「グワー」だった。敵も一瞬驚いたが、猛烈な銃声で反撃する。連発ライフル、短機関銃、自動小銃と、どれを取っても勝ち目なしである。敵もルソン戦線においては日本軍の突撃に遭遇したのは初めてではなからうか、周章狼狽したとのこと。かなりの打撃を受け、死傷者も多く出たとのことだった。

私は、前述の蝟壺陣地では各兵士の意思の疎通が図れず疑心暗鬼に陥ると思つて、各蝟壺間に散兵壕を掘り共に顔が見え会話の出来るようにし、また夜間は全員一カ所に集まって休む大きな壕を掘った。

四月十九日、大隊長戦死の日に光延分隊の前面に敵M4戦車が現れた。全力で小銃を乱射して撃退した。敵の戦法では砲爆撃で陣地を壊滅状態にしないと地上軍が進出して来られないのに、小銃と言えども目茶苦茶に弾丸が飛来したので恐れをなして退却した。樋野分隊は全滅だった。

その後も昼間は散兵壕、夜間は退避壕と陣地を守備した。弾薬糧秣が不足したので大和谷の集積所へ取りに行くことになり、自分と原兵長とで朝霧の中を走って三叉路から大和谷へ急行した。二大隊へ弾薬食糧を運ぶのに、敵の迫撃砲が三叉路付近に落下する危険で行けなかった。一大隊の黒田准尉はその三叉路で足に負傷をし歩行困難になっていた。第一中隊の岡本曹長は「君らの救援に行くべし」と小銃弾一〇〇発と米雑糞一杯を手渡してくれた。これだけでは糧秣不足で集

積所に行き、中村巖上等兵に無理を言つて靴下に二分の白米を受け取った。この時分は食糧を持っている者が一番強かった。

階級で命令しても「ウン」と言つて糧秣は手に入らなかった。原兵長と急峻な山道を這い登り、三叉路も走り抜け、馬の背道も敵に見られぬようにして壕まで辿り着き、全員の無事な顔を見て「ホッ」と安堵した。今夜は腹いっぱい飯が食えると皆第一線を忘れて子供のように喜んだ。もちろん火煙は敵の目標になるから夜壕の中で炊くのだ。その夜は飯盒一杯宛を各人で食した。水は後方二〇〇メートルくらい谷を下らぬと手に入らぬ。全員の水筒を持って水汲みをする。警戒は六十分交替で壕口に立つて行っていた。

腹いっぱい満足感に浸り雑談に更けた。話の中で、一日にミヌリに輸送していた時に、プンカンの中間点で川岸の一本の大木に、まるでクリスマスイルミネーションのような光を見たという話が出た。「あれは蛍だ」ということだった。戦場でこのような話が出たのも不思議だった。中には畳の上に大の字に寝て

みたい、お茶漬が食いたいという者もいた。このように我が分隊八人は心身共に元氣旺盛だった。命令を敵守して一歩も陣地を後退しなかった。

数日経過した夜に「第二大隊、誰かいるか」と呼んでいる。「おーい、光延分隊ここにあり」と返すと、「第四中隊長松崎中尉が鉄道第八連隊（鉄八）陣にあり。その指揮下に入れ」と当番の高田上等兵が告げた。「明朝、合流す」で伝令を返した。実はこの日、敵攻撃は激しく火焰放射器で焼きながら、しかも手榴弾の音激しく身辺に迫った。その夜の撤退命令だ。「死ぬ時は八人一緒だ」常日頃申し合わせていた矢先の撤退とは天運我れに味方せり。

翌早朝、朝霧の晴れぬ間に全員一時間後に集合と言つて、各陣地に戦友やいるやと呼び捜す。砲爆の後ものすごく黒く焼けた岩肌や、一木一草影も無く、各陣地壕は皆潰れ生存者の一人も確認出来ず。分隊集合し、馬の背道を通つて左手の鉄八陣に到着したと同時に霧が晴れ上がり、真っ青な大空が顔を出した途端に

米偵察機が飛来した。紙一重の行動だった。

五月初旬、金剛山寄りの親山に敵の戦車部隊が来ていた。松崎中尉が「光延軍曹、戦車攻撃に出動せよ」と言つて、黄色爆弾を背囊にいっぱい詰まったのを取り出した。平常なら即復唱して命令に従うのだが、敵が悠然と構えているのが肉眼で眺められる。その前にもこのこ出て行けば自分が黄色薬で自爆するようになるのだ。自分は返答もせず分隊に帰り、隊士に話すと全員が「馬鹿者」とか「自分で行け」とか言っていた。この時点では光延分隊八人の団結が一番強く、何人も一目置いていた。

その後は組織的戦術でなくゲリラ戦法を取つて敵陣を攪乱した。

五月三十日、原隊復帰の命あり、全員でマンガヤン基地に帰る。六月四日、対岸のアリタオが猛砲撃を受け、大隊はビノンへ転進した。兵团命令で鉄第五四五四部隊は先発隊としてカシブに転進し、糧秣を確保せよとのことで同十二日にカシブに入った。約三十軒は

どの現地人家屋が点在し、それぞれが近くのジャングルの中に糧倉を持っていた。これを無断借用（奪略）して精米して食した。二週間ほどで鉄兵団全部隊が集合した。食糧に限界あり、次なる目的ピナパガンへ先陣として出発す。時七月十四日、健常者六日・患者隊七日の食糧を携行で、地図上直線距離六〇キロを東北方ピナパガンに向かって転進した。

第二日大雨で川が氾濫のため一日足止めさせられ、一週間前に先導隊第一中隊長西本中尉外十人が道印を付けていたがそれも消えて無くなり、五万分の一の地図を頼りに人跡末踏のジャングルに迷い込んだ。

そもそもバレンテ峠を敵に突破された時点で鉄兵団残存兵力は五号国道の東側に傍り、敵が国道を北進した結果尚武集団と離れ、命令連絡が途絶した。前述の転進時も左側に寄って進めば当初予定の如く一週間で全員進出できたものを、左は敵に近づくと見て右から迂回して目的地に進まんと、部隊長はじめ幹部の意見だったと思う。よって先陣は二十日かかり、後続部隊は一カ月もジャングルを彷徨する羽目になった。戦傷を

負い病魔と闘い、食無く餓鬼となり斃れた戦友数知れず。真に哀れな戦死だった。

先陣ピナパガンに到着。即食糧を収集。トウモロコシを多量に調達し、自動車隊十余人で後続救援のため出発す。

路傍に倒れている戦友には軟らかく炊いたトウモロコシを食わせて励まし、その他多くの他部隊の勇者を元氣付けてきた。その間もう一日か二日早かったら生命を保持できたような状態で、幾百もの草むす屍と化した英霊に出会った。ご冥福をお祈りした。死後三日も経過すると体内にガスが発生し、丸々と腫れ上がり、翌日は蛆虫がわき、大地の餌食となる。御遺骨は永遠に故国には帰れず、ただ安らかな眠りを祈るのみだった。

八月十五日、米軍の破声ピタリと止む。昨日まで遠雷の如く鳴っていたがどうしたことかと思った。八月十九日、師団参謀長はじめ平林参謀ほかピナパガン到着。翌二十日師団長以下司令部主力到着。九月十日、

第十四方面軍將校特使としてピナバガンに来る。終戦の命令書を発表。

八月十三日、ピナバガン出発ジョネス・エチャギにて米第三十七師団による武装解除（屈辱の時）後、マニラからカランバの大収容所に移送された。この時に戦中に捕虜となった男達が十分な肥満体で我々に指図していた。不可解な心情だった。

数少ない戦友ともここで分散された。一部は北サン方面に、また一部はマニラ近郊に。私はロスバニオス付近でPWとして労役に服し、昭和二十二年新春に名古屋港に上陸し復員事務完了で長船へ帰った。

帰郷後は一生懸命働き、第二国道沿いの家屋と隣接の田畑五反歩を処分し、神戸に出て商業一筋に働き、子供もそれぞれ家庭を持ち、これで自分の役目は終わったと思った時に「阪神・淡路大震災」に見舞われた。

老骨に鞭打って今再建したところである。はじめに申した如く、私の今日あるのは戦死された戦友のお陰とご加護があったからだと思っている。合掌。

【参 考】

米軍戦記（故・中原清重氏訳文）

第二十五師団・第三十五師団・ルソンゲリラ軍他

師団部隊 日本軍殺敵確認数 一四、五六九人

戦場捕虜数 六一四人

鉄兵団・平林克己参謀

総員 二一、七二七人

戦没者 一八、七二六人

生還者 三、〇〇一人

私の従軍談 南溟放浪記

島根県 竹田 登美

（旧姓 園山）

私は大正十一年十一月十八日、島根県で生まれました。

昭和十八年四月十日、現役兵として広島第五部隊第二中隊（戦車隊）へ入隊しました。